

紀要

■『紀要』刊行30周年記念号

- 縄文時代初頭の移動とルートについて…………… 重田 勉 (1)
- 近江地域のカマド形土器
—渡来系集団の動向把握にむけて— …………… 辻川 哲朗 (6)
- 出土文字資料に近江古代史を求めて
—付表「滋賀県下の発掘調査で検出した地震跡」— …………… 濱 修 (18)
- 正倉院文書に見える三雲寺の所在地について…………… 小松 葉子 (26)
- 奈良時代の地域開発と神社本殿
—蒲生野・金貝遺跡の調査成果から— …………… 中村 智孝 (39)
- 近江における瓦器の基礎的研究…………… 堀 真人 (50)
- 安土城の空間特性 —安土城は神社だ— …………… 大沼 芳幸 (67)
- 高島郡における山城の築城画期 …………… 小林 裕季 (75)
- 将棋史研究ノート8 —歩兵の存在感— …………… 三宅 弘 (84)
- 研究ノート 近代化の痕跡
—彦根市松原内湖遺跡の鉄道遺構・遺物— …………… 小島 孝修 (89)
- 琵琶湖地域における人と森の相互関係史の解明に向けて
—滋賀県の遺跡における古生態学データの集成— ……………
林 竜馬・佐々木 尚子・瀬口 眞司 (97)

30

安土城の空間特性

—安土城は神社だ—

大 沼 芳 幸

1. 「神と武家は山頂に坐す。」

何故、武家は山頂に城郭を構えなければならないのか？冷静に考えれば不可解である。山頂は、四方から風を受ける。まして台風ともなればまともに風を受け、建物の倒壊の恐れがある。何より、寒く、暑く住みにくい。さらに、落雷の危険性を絶えず抱えている。山頂は人間が居住するには相応しくない空間である。

しかし、神は姿無き気配としてのみ存在するから、気候条件など、その存在には全く影響しない。まして、自然を司る存在としての神であれば、人間的感性の気候条件など、全く意味を持たない。社殿の倒壊についても、元々神は自然物に宿る存在であり、社殿は人間が便宜的に神に捧げた施設であるから、その消滅など神は全く意に介さない。神にとって大切なことは、特異な自然条件（磐座・洞穴・巨樹・そして山頂）に宿ることである。特に山頂は、そこから見える範囲に宿る神の影響が及ぶと考えられることから、神の恩恵を受けたいと願う人間にとって、よく目立つ山頂に神が宿ると考えることは自然である。

筆者は、山（自然）と人との交渉が文化形成の原点であると考え、様々な文化遺産について学んできた。その過程で多くの山城、山寺、神社を巡る中で、冒頭の言葉を紡ぐに至った。続けると「仏は山腹に坐す」となる。

現在の神社の多くは人里に降りているが、これは、恒常的な祭祀のために、人が山上の神を里に招いた結果に他ならず、多くの場合、神社（里宮）の背後に聳える山の山頂に「奥宮」が祀られる。そうでなくとも、山頂には何らかの神が祀られることが多い。これに対して山寺は、山に依拠した宗教施設であるにも関わらず、山頂に建立されることはなく、比叡山延暦寺に代表されるように、山頂よりやや降ったところに建立される。当然と言えば当然である。気配として存在する神は、山頂の厳しい環境下であってもそこに坐す事ができる。しかし、仏は人間が創り出した存在であり、人間の奉仕を受けなければ存在できない。よって、仕える人（僧）が暮らせる環境でなければ常在できない。このように、神仏に対する信仰という視点から見れば、山頂は人間が常在するには適さない環境といえる。

しかし、この環境にあえて常在しようとした者達が居る。戦国期の武家達である。16世紀中頃を中心に、武家達は一斉にとっても良いぐらいの勢いで山に城を構え出す。無論、是よりも以前の応仁の乱を画期とした時代にも山城があった。これを「前期山城」と仮称する。この前期山城は

比較的高山に構えられ、戦乱に際しての詰めの性格が強い。これに対して、本稿で取り上げる山城を「後期山城」と仮称する。後期山城は、集落の背後の比較的低い山に構えられることが多い。さらに、近年数多く実施された山城に対する発掘調査では、山頂（稜線上の城を含む）にある城において、日常的な生活が行われていることを示す事例が多く見いだされるようになって来た。このことは、後期の山城の機能が、有事に際しての「詰め」という消極的な理由で築かれたのではなく、そこに武家が常在する積極的な理由により、築かれたものと解する方が適切である事を示している。

そして、改めて、後期山城の立地を見ると、その山が神仏の坐す聖地であることが多いことに気付く。さらに山に登った武家の階層を見れば、一定範囲の領国を有する武家、言い換えれば領国の経営・統治を課せられた武家であることが多い。これらの様相は、戦国後期の武家達は、領国を経営する手段の一つとして、聖地（特に山頂）に城を構える戦略を採ったと考えることが出来るのかもしれない。この事に関しては「安土城に見る統治景観—聖地と城郭—」『滋賀県立安土城考古博物館研究紀要20：2012』、「安土城—信長神のいます神殿—権威を視覚化する戦略」『滋賀県立安土城考古博物館研究紀要21：2013』で述べた。よって、本稿ではこれらの諸相は割愛し、この武家の思想を集大成したとも評価できる織田信長と、彼が築城した安土城の空間分析を通して、城郭の持つ機能の一面について考察する。そこには、戦闘以外の目的があったはずである。

2. 武家が神となり、城が神殿となる

信長神の神殿としての安土城安土城

武家は、聖地に城郭を築城し、神仏の権威を自分の権威にすり替える戦略をとった。このベクトルがさらに進めば、武家自身が神となり、神となった武家が坐す、神殿としての城郭に至る。これを具現化した者が織田信長であり、築城されたのが安土城である。この視点から安土城を分析する。

聖地としての安土山

安土城築城以前から当然のことながら安土山はあった。安土山は、標高約200m（比高差約100m）の丘陵ではあるが、驚くほど広い範囲からこの丘を視認することができる。言い換えれば、「目立つ山」である。安土城築城以前の安土山の土地利用については、安土城築城に際しての破壊を受けているため明確には判らない。しかし、安土山には、数

多くの古墳が築造されていた事が知られる。また、山中から白鳳期の軒丸瓦が出土することから、古代寺院が造営されていたことが判る。また、伝承では、安土山中に「九品寺」と呼ばれる寺院があったとされる。さらに、安土山の麓には平安時代後期の千手十一面観音を伝える会勝寺が、百々橋道から城内への登城道の途中には、これも平安時代後期の薬師如来座像を伝える石部神社が、安土山の西には、桑實寺と関係する石駒祇園社が建っている。このように、安土城の築城時にすでにあったと考えられる社寺が現存しているのである。

また、安土山のほぼ中央のピークの北斜面には、薬師平と呼ばれる郭群が展開する。この郭群の構造は、最上段に最大面積の郭があり、麓からピークに至る城内路の左右に郭が雛壇状に造られている。しかし、最大郭を始め、各郭に目立った防御施設はなく、非常にオープンな空間を構成している。この城内路の左右に平地が展開する構造は、近江によく見られる天台系の山寺の構造そのもので、清水山城・田中城・小堤城山城等、中世寺院を骨格とする縄張りに類似する。実際、ここに薬師如来を祀る寺院があり、築城に際し、この寺院が城下に移されたとする伝承があり、この時移座した平安時代末頃の作と推定される薬師如来が、近江八幡市安土町の湖見堂に安置されている。この状況は、安土城築城以前に安土山に天台系の山寺があり、これを城の構造に取り込んだことを示唆している。これらの安土山をめぐる諸相は、ここが多数の宗教施設が展開する強い聖地性を持つエリアであることを示している。

信長は安土山の聖地性を意識して、ここに安土城を築城したが、このベクトルは、他の戦国大名と変わるものではなく、彼自身の居城の変遷、すなわち、小牧山城・岐阜城の延長線上にあるものでもある。

しかし、安土城の構造は、これまでの信長の城と根本的に異なる思想に基づいている。それは、「人間」としての武家の城から、「神」としての城への転換である。

筆者は、信長は自らが神となり、日本を統治しようとしたと考え、この事を主張している。ルイス・フロイスの『日本史』には、「(信長は)自らに優る宇宙の主なる造物主は存在しないと述べ、彼の家臣らが明言していたように、彼自身が地上で礼拝されることを望み、彼、すなわち信長以外に礼拝に価する者は誰もいないというに至った。」「自らが単に地上の死すべき人間としてでなく、あたかも神的生命を有し、不滅の主であるかのように万人から礼拝されることを希望した。」と記述されている。これを素直に読めば、信長は神になろうとした事になる。信長が神にならなければならない理由は、真の日本の統治者となるためには、天皇の上位に位置する存在、則ち天皇以上の神威を持つ神になるほか無かったからである。(大沼2004)

支配を象徴する聖地としての安土城

武家が築城する聖地は、その武家が支配しようとするエ

リアに影響力を持つ神の坐す聖地である。六角氏であれば織山、京極氏であれば伊吹山、浅井氏であれば浅井岳（小谷山）である。それでは、近江一国ではなく日本という、当時考え得る最大のエリアを支配するために拠るべき聖地とは何処であろうか。さらに、信長は天皇に対抗し、これを凌駕する力を持つ神になろうとした。この権威を象徴する聖地とは何処であろうか。かつ、信長が拠って立つところは、聖的な権威に加え、世俗的な力を充実させ發揮させる場所である必要がある。

天皇に対抗するために拠って立つ聖地としては、伊勢神宮、比叡山、富士山、そして琵琶湖が考えられる。伊勢神宮は天皇による統治を象徴する聖地である。しかし、世俗的に日本を支配する拠点としては、地理的に成りがたい。かつ、信長は天正十年（1582）に伊勢神宮の式年遷宮を復活させるための費用として、千貫の寄進を要請された際、とりあえずの費用として三千貫を負担し、不足分は必要に応じて出費するように命じている。巨額の寄進の理由を『信長公記』は、不足分を勧進により賄おうとする伊勢神宮に対し「民百姓らに悩みをかけさせられ候ては、いらざるの旨」と説明している。このことは、信長が天皇に対して下手に出ているように見えるが、裏を返せば、信長の援助無くして天皇家の権威を維持することができないこと。さらには、伊勢神宮の造替が、民の負担の元で行うことを暗に揶揄している事に他ならない。寄進する金額が巨額であればあるほど、信長の権威が天皇の権威に上位に立つことを印象づけるものになる。よって、信長が伊勢に本拠を置くことは有り得ない。

富士はどうか、だれもが認める日本最高峰で、生きる活力を象徴する「木花咲耶姫」が鎮座する霊峰であり、日本の自然に対する信仰の象徴とも言うべき聖地であるが、信長が日本を世俗的に支配するための拠点とするには、都からあまりにも遠い。しかし、天正十年、信長は甲斐の武田勝頼を滅ぼす。この時信長は富士を手に入れた。この時の様子を『信長公記』では、「富士の根かた、かみのが原、井手野にて御小姓衆、何れもみだりにおんうまをせめさせられ、御くるひなされ、富士山御覧じ候ところ、・・・」とあり狂喜乱舞する信長一行の姿と共に、富士の神が宿る浅間神社の神官・社僧が「大宮（浅間神社）の社人・社僧罷出て、道の掃除申し付け御礼申し上げらる。」と新たな富士の支配者を出迎える様子を記している。これらの一連の行動は、信長が富士の神威も身に纏った事を示している。信長は富士に本拠を置くことは無いが、その権威を手に入れた。

比叡山はどうか、比叡山は無論、伝教大師最澄が籠山修行をし、日本の天台宗を打ち立てた聖地であり、天皇もその権威を否定することは出来なかった。何故、最澄が比叡山を選んだのかについては、最澄の時代に比叡は既に聖地として認識されていたこともあるが、何よりも琵琶湖の西

に聳えるその立地が重要であったと考えられる。最澄の思想は「悉有仏性」すなわち命の平等に根ざした、生命の循環に根ざしている。その最澄の思想を具体的に示す場所が、命を生み出しそして支える真水の集合体である琵琶湖である。そして、最澄は天台宗の根本如来として「薬師瑠璃光如来」を据える。薬師瑠璃光如来は、その名が示すように瑠璃すなわち水の世界の神であり、東方に浄土があることから朝日の神である。水と朝日を司る神であるから、命を司る神となり、「薬師」に変容する。琵琶湖には、琵琶湖や池から出現する薬師如来の伝説が多数伝わる。かくして、琵琶湖は「天台薬師の池ぞかし『梁塵秘抄』」と表現されるに至る。（大沼 2002）

それでは、信長は比叡山に本拠を置くことを選択したのだろうか。これは、歴史が語るように完全に否定される。元龜二年（1571）、信長は比叡山を焼き討ちする。この意味については本稿では触れないが、信長は自己神格化のために比叡山の権威を否定する必要があった。それは、信長が目指した神的権威が、最澄が打ち立てた聖的権威にきわめて近いものがあったからである。（大沼2015）また、比叡山の地勢は、城を構えるには高山で相応しくない。また、あまりにも京に近く、既存の勢力からの干渉を受ける可能性が高い。よって、信長は比叡山に城を構えることはなかった。

琵琶湖はどうだろうか。琵琶湖は信長が拠って立とうとする権威、即ち命を司る神の権威、言うなれば、最澄が示した天台的な権威を象徴する聖地であり、信長が本拠を置くには実に相応しい聖地である。次に、琵琶湖の何処に本拠を置くかが問題となる。京、比叡山からは一定の距離を置くところ、信長の本拠であった中京地方とも交渉できるところ。しかも、琵琶湖（天台宗）に関する聖地であること、さらに、周囲を見下ろす適度な山地であること。これらの条件を全て満足できる地が安土山であった。安土山の聖地性については既に述べた。世俗的な視点から見れば、生産力が極めて高い近江の中心に位置すること、日本の南北を結ぶ東山道が近くを通ること。琵琶湖と伊勢、山とを結ぶ結節点としての常楽寺港を要すること、そして、三方を琵琶湖に囲まれ、比高差約100mの、城を造るには程よい高さ、全山が石垣の石材として適した湖東流紋岩で構成されていること等、信長が求めるほぼ全ての要件を満たすところが「安土山」であった。そして信長は安土山に自らを神として祀る聖地の景観を創り出した。

安土城と信長築城城郭との比較

信長が安土城に込めた、聖地的景観を造り出す戦略が、安土城に対してのみ、なされたことを、信長が近江に築城した他の城郭との比較から確認したい。

信長は近江に五ヶ所の本格的城郭を築城した。その一つは無論安土城であり、安土城は強い聖地性を持つ安土山を選地して築城されたことは既に述べた。それでは残る四城

と聖地の関係はどうであろうか。四城とは築城年代順に宇佐山城（大津市）・坂本城（大津市）・長浜城（長浜市）・大溝城（高島市）である。この内、坂本城・長浜城・大溝城は琵琶湖航路の掌握を目的として築城された水城である。

宇佐山城

宇佐山城は、元龜元年（1570）4月に敢行され、失敗した越前侵攻戦に伴い、信長の岐阜への退路を確保するために築城された城郭であるが、近江と京を結ぶ志賀越えを掌握する意味も持っていたと考えられる。宇佐山は大津市内から見て非常に目立つ山であり、山麓部の発掘調査では古代の祭祀遺物が数多く出土し、さらに中腹には「金殿井」と呼ばれる湧水があり、現在もこの湧水が神体として祀られている。このように、この山が、聖地として意識されていたことが窺われる。また、山の中腹には宇佐八幡宮が鎮座しているが、おそらく宇佐山城の築城に際して、山頂にあった神社が山腹に降ろされたものであると考えられる。

城郭の縄張りには本丸を中心に北に三の丸、南に二の丸を配する単純な構成ではあるが、東面に大規模な石垣を持つことが大きな特徴となっている。この石垣は、東面にだけあり、他の面には見られない。東面とは大津側であり、麓から見上げる面に当たる。宇佐山城が築城された元龜元年は、永禄十一年（1568）に上洛を果たしたとはいえ、この段階では信長にとって大津はほぼ敵地となっており、宇佐山城は、再上洛のため、近江掌握のための橋頭堡として、重要な戦略的役割を持っていた。この役割を果たすためには、城郭の戦術的選地は当然のことであるが、信長という武家の存在を大津の住民・そして実質的な支配者である延暦寺・日吉大社に強烈に印象づける戦略的な選地も必要となる。この戦略・戦術両面の目的を果たすため、信長は宇佐山にいます神の権威を取り込み、ここに城を築いたと考えられる。そして、信長の力を視覚的に誇示するため、山麓から見上げる場所に集中して石垣を築いたのであろう。よって、宇佐山城は、宇佐山の神の権威を取り込み、信長の大津支配を正当化しようとする意図が込められた城郭であり、この点から思量すれば、安土城と同様の視点の城郭と考えられる。

しかし、後述するように、比叡山を焼き打ちし、坂本城を築城すると、権威の視覚化という点に置いて非常に有意な山城であるにも関わらず即座に廃城される。

これに対して、信長の近江支配の進展と歩調を合わせるように築城された他の三城と聖地との関係は、全く異なる。これらの城郭は、経済的に有意性のある土地に築城されてはいるが、聖地には築城されていない。さらに全て、山にはなく、琵琶湖水面に主郭が接する水城として築城されている。築城年代を追いながらこれらの城郭を概観してみよう。

坂本城（大津市）

元龜二年（1571）9月に決行された比叡山焼き打ちの直

後、11月から明智光秀に命じて築城が開始された。築城の目的は日本最重要の港の一つである坂本港管理と延暦寺の監視にあった。その縄張りは湖岸を埋めて造成された完全な水城であり、主郭は湖岸線よりも外の湖上にあったとされる。その立地であるが、周辺に日吉大社の縁起との関わりの深い唐崎神社があるが、是を縄張りの中に取り込むことはなく、全くの普通の土地を選地している。むしろ坂本港に近からず、遠からずの絶妙の場所を選地しているように見える。坂本城は、明智光秀の居城として名高いが、光秀が自らの意志で坂本城を築城し、運営できるはずはなく、あくまでも信長の意向を受けた城であると考えべきである。

長浜城（長浜市）

天正元年（1573）に小谷城を手に入れた信長は、ここに羽柴秀吉を入れる。しかし、翌、天正二年、秀吉は小谷城を離れ、当時、今浜と呼ばれていた湖岸に長浜城の築城と長浜城下町の造営に取りかかる。この行為も秀吉の独断によるものではなく、信長の意向を受けて行われた行為であることは明らかである。長浜の「長」は信長の「長」である。長浜城の機能は、湖北の運営と、湖北の要港を管理することであったと考えられる。則ち、敦賀からの物資が琵琶湖に漕ぎ出される、琵琶湖最大の積出港である「塩津港」、中京方面からの物資の積出港である「朝妻港」の双方を管理する、政治経済的な機能が求められた城郭であると評価できる。長浜城の縄張りも坂本城と同様、琵琶湖を埋め立てて造成された完全な水城である。また、その立地であるが、当時の寒村であった今浜を選地していることから判るように、聖地性の全くない「普通」の土地であった。

大溝城（高島市）

大溝城は、天正七年（1579）から築城が開始されたとされる。城主は信長の甥である織田信澄である。大溝城の機能は、湖西方面の運営と若狭と琵琶湖の結節点として重要な役割を果たしてきた「勝野津」の管理にあったと考えられる。大溝城の縄張りは、勝野津の背面に広がる内湖の乙女ヶ池を造成して作られた水城で、内湖に面して天主台が作られている。また、その立地は、勝野津という要港に面してはいるが、聖地性のある場所ではない。むしろここは、勝野津という繁栄した世俗的価値の高い土地であり、坂本城、長浜城と同様、経済上の理由が前面に出た選地である。

信長の水城と安土城

安土城は、ほぼ完全に近江を掌握し、かつ、天正三年（1575）の長篠合戦により武田勝頼に勝利し、東国からの軍事的脅威が減じた天正四年から築城が始まり、天正七年（1579）には一応の完成を見たとされる。その機能は信長が神となり君臨するための拠点であり、その象徴である。その立地は、先に見たように安土山のほぼ全面を城として使っている。安土山を取り巻いているのは現在は水田であ

るが、これは昭和三〇年代に形成された景観であり、それ以前は大中之湖と呼ばれる巨大な内湖に突き出た半島であった。則ち、信長の時代の安土城は三方を水に囲まれた水城であった。また、湖東の要港として栄えた常楽寺港を間近に望む場所にあり、琵琶湖航路の掌握という機能も持った城である。

しかし、他の水城、坂本城、長浜城、大溝城と決定的に違う点がある。一点は安土城のみが山城であり、他を見おろす、言い換えれば仰がれる場所に主郭が作られている点。そしてもう一点が、安土城のみが聖地に造られている事である。安土城の聖地性については先に触れたとおりであるが、他の三城が全く聖地性のないところに築城されていることと、好対照を為している。この二つの相違点に築城に対する信長の主張が見て取れる。則ち、聖地性のある山に拠るのは、統治者としての信長だけであり、他の者（信長の家臣）は、世俗的な権威を発現させれば良い、という、「聖」を背景とした、強力な求心力を求める主張である。そして、信長は神として近江を見おろした。天正7年段階で、近江に信長より高所に坐す武家は居なかった。

宇佐山城における聖地の選地は、まだ、支配権の確立していないエリアにおける信長の存在感をアピールするために採られた戦略と解される。何よりも、坂本城の築城と共に、宇佐山城の機能は停止する。信長は光秀が聖地に拠ることを許さなかった。よって、宇佐山城は、信長が永続的に君臨するための城ではなく、あくまでも対処的な戦略と戦術に基づき造られた城であり、安土城に込めた戦略とは根本的に違う城であると理解される。

このように、「聖」を背景に城を構え、これを統治の装置として機能させようとした信長の姿を、安土城の構造を通して分析する。

安土城の空間構成 安土城は神社である

安土城の構造を客観的に見ると、二つの異なる空間により構成されていることが解る。一つは、城でありながら、人を受け入れることを前提の造られた開放的空間であり、一つは選ばれた者しか入ることのできない、厳格に封鎖された空間である。

安土城内の開放的空間

安土山の南端のピーク上に惣見寺が建立されている。惣見寺に関して、ルイス・フロイスの『日本史』では「偉大な当日本の諸国のはるか彼方から眺めただけで、見る者に喜びと満足を与えるこの安土の城に、全日本の君主たる信長は、惣見寺と称する当寺院を建立した。当寺を拝し、これに大いなる信心と尊敬を寄せる者に授けられる功德と利益は以下のものである・・・」と表現されており、神となった信長を礼拝させるための寺院であると説明されている。この説明が正しいとするなら、惣見寺までの空間は、人の参入を前提とする空間であることを示している。

また、惣見寺に至る百々橋道の途中には、信長が意識的



図1 安土城は神社である（大沼作成）

に存置を認めたと考えられる薬師如来を本地とする石部神社も鎮座しており、摠見寺までの空間が開放的空間であることを裏付けている。

さらに弁天内湖から、織田信忠邸に至る「七曲り道」と呼ばれる城内路が残る。この通路は、発掘調査が行われていないため、詳細は不明であるが、城門的な防御遺構は無く、安土山の稜線まで障害無く侵入出来そうな印象がある。

次に、本来最も厳重に防御されるべき大手の構造を見る。これまで行われた発掘調査の結果、大手には四カ所の城門があり、内、3カ所までが平入りの虎口構造であることが判明した。食い違い虎口の構造を信長が知らなかったわけではない。現に、南端の虎口は食い違いであるし、主郭に開口した黒金門、台所郭から主郭への虎口は食い違い虎口により厳重に封鎖されている。しかし、大手門の構造は、開放的であり、大手に対する防御をほとんど意識していない構造としか言いようがない。

大手門から大手路に入る。発掘調査の結果現れた大手道は幅約6m、長さ約120mにも及ぶ直線の道である。この間、道を遮蔽する門すらない。敵の侵入を妨ごうとすれば、城内路は細く、曲げるのが常道であるが、安土城の大手道にはこの常識が全く反映されていない。しかし、大手道から山上を見上げると、通る者に覆い被さるように巨大な天主が屹立している。大手道は、途中から七曲り状にクランクしながら進むが、開放的通路であることは直線部分と変わらない。このオープンな大手は、伝織田信忠邸まで続く。

伝織田信忠邸は、安土山の稜線上にある、城内では本丸に次ぐ面積の郭である。発掘調査の結果、江戸時代以降、摠見寺関係の土地利用がなされていたためか、全く遺構は検出されなかった。しかし、この空間は、大手道、百々橋道、七曲り道の城内路が合流するところであり、道は一本に絞られ、黒金門に向かう。この状況から、この空間が建物のない、広場の空間であつても考えることができる。

このように見ると、安土城の東面・南面、すなわち街道と城下に面した空間は、非常に開放的な空間であり、城内ではあるが城下の空間であることが判る。

厳重に封鎖された空間

しかし、^{くろがねもん}黒金門を境にして状況は一変する。安土城は高石垣を多用した本格的な石の城の嚆矢として認識されているが、用いられる石材の大きさが、黒金門を境として全く異なる。黒金門に至る空間の石垣は、大手を含め小振りの石材を用いているのに対して、黒金門より内側の空間には巨石が数多く用いられている。「当山大石を以て、御構への方に石垣を築かせられ」「所々の大石を引き下し、千、二千、三千宛にて安土山に上せられ候」「大石を撰び取り、小石を撰び退けられ」といった『信長公記』に現れる記述が、山上の巨石の石垣、山麓の小石の石垣の状況を表しているのかもしれない。

黒金門は、主郭エリアの南に開口し、ほぼ完璧な食い違

い虎口を構成する。さらに、前面・途中に門が入り、石垣上にも遮蔽施設があつたと考えられる。このように、黒金門は、外からの進入を厳重に封鎖し、門の内側への進入を限られた者にしか許さない結果となっている。さらに、二の丸・三の丸・本丸・天主の主郭ゾーンの外周は、高石垣で圍繞され、外の空間から厳重に封鎖されている。さらに、主郭ゾーンの要所には門が配され、人の進入を拒絶している。

主郭ゾーンの中心をなすのが、本丸と天主である。本丸は、発掘調査の結果、秀吉の時代の清涼殿に似た構造であることが明らかにされた。このことは、『信長公記』天正十年（1582）正月に、「御一門歴々なり。其の次、他国衆。各階道をあがり、御座敷の内へめされ、悉くも、御幸の御間拝見なされ候なり。続いて御馬廻・甲賀衆が招き寄せられ、御幸の御間拝見仕り候へと御説にて、かけまくも忝き、一天万乗の主の御座御殿に召し上せられ、拝濫に及ぶ事、有りがたく、誠に生前の思ひ出なり。」さらに、御幸の間に「皇居の間と覚しくて、御簾の内に一段高く、金を以て瑩き立て、光り輝き、衣香当りを撥ひ、四方に薫じ、御結構の所有り。」と記述されている。この記録は、正月に家臣達に対し本丸を公開した際のものであるが、安土城を考える上で二つの重要な事柄を示唆している。

一つは、本丸には、「御幸の御間」があり、本丸が、天皇の行幸を仰ぐために造られたものであることを示していること。このことは、発掘調査の成果とも合致する。もう一つは、本丸が、「一門衆」ですら参入の許されない、いわば、信長と天皇の占有空間であることを示していることである。

次に天主に至る。天主は、七重構造で、本丸の横に築かれた天主台石垣の上に聳える。天主はさらに、儀礼の空間・信長及び家族の居住空間のある下層の空間と、信長の独占空間と考えられる六重・七重の空間とに分けられる。下層空間には、信長との儀礼を行う者、及び、信長の家族の他、信長に仕える者しか参入することは許されない。これに対して、六・七重は各一間であり、信長しか坐す事が許されない、信長の絶対的占有空間であると理解される。

このように安土城の空間構成を見ると、信長の占有空間である天主の六・七重を中心として、参入する者を信長個人から徐々範囲を拡大して行く、求心的な構成であるといえる。この空間を占有するモノに対する求心的構造は、信長を神に置き換えれば、神社の構造の他ならない。

安土城の構造と神社

神社の構造と安土城の構造とを比較してみる。安土城大手門は、緩く外界と結界するが、人の参入を拒むものではなく、むしろ参入を促す装置であり、神社に対応させると「鳥居」に当たる。大手門に接続する石塁や、安土山の外周に巡らされた石垣は、神社の周囲を緩く結界する「瑞垣」に相当する。次に、幅の広い直線的な大手道、摠見寺

に向かう百々橋道などの城内路は、中心部に人を導き、同時に神に参拝するための気分を高揚させるための「参道」にあたる。信長を拝するために造られたとされる惣見寺は天主に対する「拝殿」、もしくは、仏と習合した信長を祀る「神宮寺」に当たる。ここまでの空間は、不特定多数の者の参入を許す空間である。

嚴重に封鎖された黒金門より内側は、信長に選ばれた者、信長に奉仕する者のみが参入の許されるゾーンであり、神社に対比すれば、特別参拝を許された者と、神官のみが参入することが許される空間に相当する。このように考えれば、黒金門は、「神社中門」に、主郭ゾーンを圍繞する高石垣は、神社中門にとりつく「瑞垣」に相当する。主郭ゾーンを構成する建物は、何れも、特に信長に許された者のみが参入することが許される空間であり、神社では「撰社」に相当する。中でも、本丸は天皇と信長が共有する空間であり、撰社の中でも、特に格の高い施設となる。

そして、安土城の中心を為す天主は、信長（神）が住する、「神社本殿」となる。天主の構造もさらに分かれる。信長の家族、信長との儀礼を行う者、信長に奉仕する者の居住と参入が許される下層部分が、神社本殿に対比させれば、神官のみが参入できる「外陣」に、天主の六・七層の信長の占有空間は、神社本殿に対比させれば、何人も参入することが許されない「内陣」に相当する。

このように分析すると、安土城の構造は、日本の神を祀る神社の構造を模していると言うことができる。そして、この安土城の構造は、近世城郭の基本的な構造を規制することになる。

天主台石垣と磐座

安土城以降の近世城郭の外観を特徴付ける構造に天主（天守）がある。天守の作事構造の意味するところは前述したように、少なくとも安土城天主は神社本殿を模したものであることができる。それでは天主を支える天主台は何を意図して造られた構造物であろうか。

石垣構築の意味は、法面上に重量構造物を乗せるための基礎構造として理解される。この事は決して否定されることはない。しかし、その構造的な意味の他に、石という動かざるものを法面に積み上げる、という行為そのものに意義があったとも考えられる。構造的強度を求めるのであれば、あえて巨石を用いる必要はない。しかし、城郭の石垣、特に安土城以降の石垣では、基底部分ではなく、石垣の上部にあえて、巨石が用いられる傾向、言い換えれば、より目立つところに巨石を用いる傾向がある。このことは、石垣を通して城主の力を視覚化しようとする意図を端的に物語っている。

そして天主台の石垣である。「武家と神は山上に坐す」。天主をより一層高くしているのが天主台の石垣である。周囲より明らかに高所に建つ天主をより一層高くする必然は感じられない。仮に天守まで攻め込まれたとすれば、後に

引くことも出来ないわけであるから、その戦いは終わりである。天守の機能は、武家が神を意識し、山上に建つことにある。そして、神社本殿に対比可能な天主を支えるのが天主台石垣である。『信長公記』に象徴的な記述がある。「・・・蛇石と云ふ名石にて勝たる大石に候間、一切に御山に上らず候。然間、羽柴筑前・滝川左近・惟住五郎左衛門三人として助勢万余の人数を以て、夜日三日に上せられ候。信長公巧を以て輒く御天主へ上させられ、昼夜山も谷も動くばかりに候キ。」安土城の築城に際し、山上に蛇石と呼ばれる巨石が引き上げられたのである。同様の記事は、宣教師の記録にも見えることから事実なのであろう。しかし、そのような大石は山中にはない。天主台に対する地中レーダー調査では判然としなかったが、状況と記録から判断するならば、蛇石は天主台の中に埋め込まれていると考えておきたい。と、するならば、山上に引き上げられた巨石は人為の磐座に他ならない。人間でもある信長が、磐座上に常在することは出来ない。かくして、この磐座の上に神となった信長が坐す天主が建てられたのである。信長神を祀る本殿と天主を考えれば、当然の構造といえよう。人為の磐座は、さらに天主台となった。すなわち、天主台そのものが、神の坐す磐座なのである。

この安土城のイメージが、以後の近世城郭の構造を規制することになる。近世城郭の多くが、山若しくは丘陵の頂部に建てられるか、そうでなくとも城郭の中心をなす天守は天主台の上に建てられる。天主台が人為の磐座であるとするれば、近世城郭の天主の機能は、武家神を祀る本殿である。豊臣政権、徳川政権、そして全国の近世大名達は、営々と天主を建立し続ける。それは、信長が確立しようとした、武家が日本を統治することの正当性を主張し、象徴する装置として天主（天守）が強烈なイメージとして意識されたからである。しかし、信長以降の武家が天主に居住することはなく、従って安土城のように天主内部を華麗に装飾することもない。何故ならば、彼らは、死して後、神となって祀られることはあっても、信長のように生きた神として君臨することができなかつたためである。

江戸時代初期に数多く造られた天守も、災害や経済的な理由により次々と姿を消して行く。しかし、多くの場合、江戸城に代表されるように天主台は残され維持される。これは、武家が、日本あるいは、領国を神的権威で支配することの象徴が、人為の磐座としての天主台の景観として意識されたからである。よって、秀吉の大阪城天守台は、徳川の手により埋め殺され、その上に徳川の大阪城の天主台が造られる。まさに神々の抗争が天主台を舞台に為されたのである。

3. 聖地に拠る武家

ここまで、聖地を背景に城を構え、聖地に宿る神の権威と武家が、そのエリアを統治する権威とをラップさせよう

とした姿。更に進んで、聖地そのものに城を構え、神の権威と武家の権威とを融合させようとした武家の姿。そしてこれを究極まで押し進め、信長と安土城のように武家自身が神となり、日本を統治する姿を追って来た。そして、武家と聖地（神）との関係が、その後の近世城郭の姿を、言い換えれば武家の統治形態を視覚的に示す装置として維持、機能し続けてきたことを示した。

この武家と聖地との関係に一貫して流れる思想は「戦いの回避」であると考えている。戦闘装置である「城」に拠り、暴力を問題解決の手段として選択したように見える武家であるが、暴力が問題の全てを解決する手段とはなり得ないことを、最もよく理解していたのは武家自身に他ならなかったはずである。暴力の行使による、戦闘員の「死」・領民の「死」の累積は、領国の経営（日本という国の経営）にマイナスとなることはあっても、プラスには絶対にならない。武という暴力を背景にしつつも、是をできるだけ行使せずに問題の解決を図るために利用されたのが「聖地に宿る神の権威」である。聖地、特に山に宿る神は、其の山から見える範囲のエリアを支配する権威を持っている。神が機能していた時代、神の権威は絶対であり、これに逆らうことは、そのエリアでの生活を否定されることであり、ある意味「死」を意味していた。この神の権威を武家が得られれば、武家はその神と同等の範囲を支配する権威を身に纏うことができる。神の権威にすり寄り、その権威との融合化を図ろうとする武家の姿が、山城の景観を生み出した。このベクトルを究極までに高めれば、自ずからその帰結の姿が見えてくる。それは武家自身が神となることであり、その支配する範囲を象徴する聖地を造り、これに拠る姿を演出することである。これを実行に移した武家が織田信長であり、選んだ聖地が安土山であり、ここが日本を支配する神の居ます聖地である事を示すために採られた戦略が、琵琶湖という類い希な聖地の独占と、安土山における天皇との対決である。信長は暴力を否定はしなかったが、自らが暴力の上位に位置する、権威を持つことを、そして、天皇の上位に位置する神であることを安土城の景観として、視覚的に示そうとした。

結果として、天皇との対決が実現しなかったが、信長が生み出した戦略は、秀吉・家康に受け継がれる。特に徳川政権は暴力を政権の基盤に置きながらも、信長が示した戦略をより複雑な形で具現化させた。それは暴力装置としての武家でありながら、暴力を「道」「術」として形骸化させると同時に、家康を神格化し、この子孫である將軍の権威を天皇以上に高める戦略である。言うなれば、「文化」の力で暴力を形骸化させた。この武家の権威を象徴する装置として維持活用されたのが城郭（天守）である。結果として、徳川政権は暴力に依拠した政権であるにもかかわらず、おそらく、日本が、問題解決の手段として「戦争」という暴力を選択して以後、200年にも及ぶ戦いのない時代

を現出させたのである。

しかし、明治政府はこの暴力を解き放った。武家が軍人と化したのである。その結果、日本は内戦は元より、4回にも及ぶ対外戦争を経験することになる。そして、1945年を向かえる。この反省を踏まえ、日本は再び暴力を「文化的な力」でコントロールする戦略を採った。その結果、70年を超える戦いのない時代を日本にもたらした。厳密な意味ではないが、江戸時代の約200年に次ぐ長さの、戦いのない時代である。

今、我々は、織田信長という先鋭的な暴力装置が、結果として評価される「戦いを回避する」戦略を、現代流に学び取る必要がありはしまいか。

文献（著者名・刊行機関名50音順、刊行年順）

- 大沼芳幸(2002)「文化遺産としての琵琶湖－[水]を介した人類と自然の永続的共生を示す資産群－」『紀要』24、財団法人滋賀県文化財保護協会
- 大沼芳幸(2004)「軍神から統治の神へ－信長・安土城に見る神的世界－」『平成23年度秋期特別展 武将が継った神仏たち』、滋賀県立安土城考古博物館
- 大沼芳幸(2015)「信長が見た近江『信長公記』を歩く」、サンライズ出版

（おおぬま よしゆき：事務局 普及専門員）

【編集後記】

当協会は、〈文化財をとおして地域に力強く貢献していくこと〉を組織の使命に掲げ、その基盤となる調査・研究能力を向上させ、その蓄積を形にしていくための場として『紀要』を位置づけてきました。今回、ここに30個目の結晶をお届けいたします。

本号では、縄文・古墳に関わる諸問題のほか、古代の地域の開発、瓦器の基礎的研究、戦国の城の位置づけ、さらには将棋や鉄道にまつわる歴史、人と森との関係史などが検討され、調査の過程で生まれた多様な課題に取り組む職員・関係者の姿を反映させるものとなりました。

地域と関係機関の協力の下に実施できた調査成果を適正に活かすため、更なる研鑽に励んで参ります。今後も皆様のご批判とご教導をあらためてお願いいたします。 (S. S)

紀要 第30号

刊行年月日：平成29年（2017）3月31日

編集・発行：公益財団法人滋賀県文化財保護協会

520-2122 滋賀県大津市瀬田南大萱町1732-2

(tel) 077-548-9780 / (fax) 077-543-1525

(e-mail) mail@shiga-bunkazai.jp

<http://www.shiga-bunkazai.jp/>

印刷・製本：三星商事印刷株式会社